

京けいに入いる使つかいに逢あう（岑参しんしん）

故園こえん 東ひがしに 望のぞめば 路みち 漫まん々

双袖そうしゆう 竜鍾りゆうしゆうとして 涙なみだ 乾かわかず

馬上ばじように 相あい 逢おうて 紙筆しひつ 無なし

君きみに 憑よつて 伝語でんごして 平安へいあんを 報ほうぜん

故園東望路漫漫 雙袖龍鍾淚不乾
馬上相逢無紙筆 憑君傳語報平安

解説 西域の前線での望郷の念を詠ったもので、岑参が玉門関西方の塞外の旅を続けているとき、都へ向かう使者に逢い、長安のわが家をしのぐの作。

語釈 ※故園＝故郷。家族のいる長安をさす。※漫漫＝果てしない様子。※竜鍾＝年老いた様子や失意の形容に使用されるが、ここでは、涙があふれ落ちるさま。※憑＝頼む。※伝語＝伝言。ことづて。※平安＝無事のこと。

通釈 東のほうの、ふるさとの方角を眺めると、道は、はるばると果てしなく続いている。それを眺めているうちに悲しくなつて、両袖に涙がはらはらとこぼれ落ち、乾くいとまもない。馬の上でお使いに会ったので、手紙を書くための紙と筆の用意もない。そこであなたに伝言を頼んで、せめて無事でいることを伝えよう。